

新型コロナウイルスの猛威はひとまず収束に向かっていくようです。

今月25日までの国内の感染者数は約1万6400人、死亡者は約850人で、他の先進国と比べて、圧倒的に少ないことに驚きます。一方、世界では530万人超、34万人超にも上ります。

しかし、100年前のA型インフルエンザのパンデミックでは、全世界で人口の4分の1に相当する約5億人が感染し、4000万人が死亡したと推定されています。1918年から20年に流行した「スペインかぜ」は日本でも猛威をふるいました。

18年11月にピークとなり、翌年の夏前に収束した第1波

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

「全体としての健康」大切に

たことが原因かもしれないませんが、致死率は約5・3%と第1波の4倍強になりました。内務省の記録では全流行期間の総感染者は約2380万人、死者約38万9000人とされています。

なお、インフルエンザウイルスが初めて分離されたのは33年ですから、ワクチン開発などは論外でした。当時の対

のは当然ですが、日本人の死因のトップはがんで、戦前から増え続けています。日本における年間のがん死亡数は、スペインかぜによる国内総死亡数とほぼ等しい約38万（2019年予測）です。流行性の感染症と異なり、毎年40万人近い死者を出し続けていることを忘れてはなりません。

コロナ禍には必ず終わりがありません。まずは、一人一人の行動によって、早期の終息を目指す必要があります。その上で、がんに対する備えも怠ってはいけません。

コロナ問題にばかり関心が集中し、「全体としての健康」が損なわれることのないようにしたいものです。

（東京大学病院准教授）

では、患者数は人口の約4割にあたる約2117万人で、

死者数は25万7000人、致死率は約1・2%でした（内務省記録）。なお、当時、皇

太子だった17歳の昭和天皇も

は、免疫を獲得した人が増え

は、患者数は人口の約4割にあたる約2117万人で、

死者数は25万7000人、致死率は約1・2%でした（内務省記録）。なお、当時、皇太子だった17歳の昭和天皇も

罹患（りかん）しています。19

20年に第2波が襲い、患者は約241万人、死者は

約12万8000人でした。感

染者が第1波より少ないの

は、免疫を獲得した人が増え

は、患者数は人口の約4割にあたる約2117万人で、

策は、マスクの着用、患者の隔離、接触者の行動制限、手

洗いや消毒、集会の延期といったものでした。今の日本と

ほとんど違いはありません。

流行期の感染症に警戒する

は、患者数は人口の約4割にあたる約2117万人で、

死者数は25万7000人、致死率は約1・2%でした（内務省記録）。なお、当時、皇太子だった17歳の昭和天皇も